

報告

天文教育フォーラム報告

天文教育フォーラム実行委員
沢 武文（愛知教育大学）

九州国際大学で行われた 2006 年日本天文学会秋季年会において、天文教育フォーラムが、日本天文学会との共催で 9 月 20 日（水）15:30～16:30 に行われた。フォーラムのタイトルは「天文学系の学部を志望する大学入学者の現状」であった。

現在、小・中・高において学習内容のスリム化に加えて、選択と総合化が進んだ結果、理科教育の危機を通り越して、学力低下の傾向までが指摘されている。今回のフォーラムは、こうした教育環境の変化の中で理系、特に天文学系の大学生の現状をできるだけ正確に把握することを目指したものであった。

最初に、東京大学の江里口良治さんによる「東大の理系学部の学生のここ数年の変化について」の報告があった。これは、東京大学における過去 50 年間の大学入試受験者数、倍率、大学院希望者数などの具体的なデータを基に、理系の希望者が減少しているのかどうか、学力低下が進んでいるのかどうかを検証しようというものであった。この報告によれば、東京大学においては、基礎科学系学生志望者は漸減傾向にあるのに対し、実学系の学部・学科志望者は漸増傾向にあること、天文学については例外的に志望者が多い状態を維持していること、学生の学習時間は必ずしも多いとはいえない、ということであった。また、学生に定期的に学習をさせるためには、課題を課すことが重要であるとの指摘もあった。

次に、教員養成大学の現状として、大阪教育大学の福江純さんによる「教員養成系大学の理系志望学生の経年変化と現状について—大教大の場合—」の報告があった。教員養成

系大学では、独立行政法人化以降、予算と教員の削減、書類書きなどの雑務の増加によって、研究条件は劣悪になっているとのことであった。ただ、天文に関しては、教務職員や学振研究員の採用がなされ、また研究室に所属する学生もこの数年多い状態が続いているため、研究のアクティビティーはかなり高い状態にあるとのことであった。また、学力低下に関しての福江さんの印象では、「学力低下は確かに認められるが、単なる授業時間数の減少による知識低下であり、学習意欲の低下ではない」ということであり、「いかに、学生にやる気を持たせるか」が重要であるとのことであった。

1 時間という限られた時間であったが、いずれも具体的なデータに基づくものであり、今後の大学における天文や基礎科学教育について、貴重な示唆を与えるものとなった。総会前という時間だったためか、参加者数はおよそ 200 名で、立ち見が出るほどの盛況であった（図 1）。

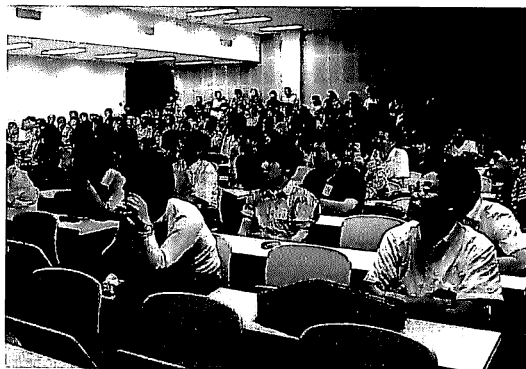


図 1 熱心に講演を聴くフォーラム参加者